昭和51年度末の人事異動で、足立仂校長は突然隣の学校へ転勤になり、新しく稲田和夫校長が着任された。しかし、研究同人で新しく加わったのは校長の他は一人だけであり、一年次の研究態勢がこのまま続いていたので、昭和52年度も「国語の基礎学力の充実」という主題で研究を続けてほしいと新校長にお願いし了承を得た。当時の新校長の気持ちがよく現れた一文があるのでその一部を紹介したい。

（※次頁より二頁に亘って掲載＝著者注）

忘れられないあの日の輝き　「漢字教育八年の歩み」出東小学校刊による

斐川町教育委員会社会教育指導員　稲田和夫

1、決断を迫られて

⑴ 嘘みたいな話だが

●心をうたれて

私は昭和52年4月5日に着任したが、その翌日から折を見ては江角研究主任から研究経過について報告を受けた。聞かされたという表現が適切かも知れない。何となく先生方の熱意が電波のように伝わってくる気配をしきりと感じたのを覚えている。

前年度（51年）から、基礎学力の向上をめざして国語のよみ、かき、特に朗読を主体とした研究にとりかかったこと。中でも特に全校児童の漢字習得実態調査には私も心魂を強烈に揺さぶられる思いがした。低習得率等より、綿密な内容、考察を含めた先生方の熱意とその労苦の程に心を打たれたのである。一漢字毎に教科書に掲載された回数を丹念に調べ上げ、これと子供達の習得率との相関関係に迄研究が及んでいたからである。初発の研究段階として無類の成果であり、研究スタッフを始め全職員の熱湯のような意欲を感じた。教科書に数回しか掲載されていない漢字の定着率は極めて低いが、その中でも平素社会生活の中で目

に触れる機会の多い漢字は高率であるし掲載回数の多い漢字程高率である等考察がなされていて、要は、できるだけあの手この手で子供の目に触れさせる手だてを講じてやればいいではないかということである。

●石井先生の御著書に接して

次に研究主任から「石井式漢字教育革命」を読むよう奨められた。感激した後で読むのだからそれこそ石井式漢字教育は金科玉条。本校職員の考察と全く一致する。そこで石井先生の著書は総て購入し目を通すことになった。（但し石井式を実施するに当っては、種々の問題が予想され、安易に踏みきれないものがあり、思案熟慮の日が続く。）

※　そして先生は「この意欲、この研究スタッフならもう逡巡することなく石井式漢字教育の実践に踏み切るべきであると意を決したのは九月の中旬であった」と述懐されている。

教師も燃えた、子供も燃えた。精薄児も喜々として挙手している。こんな素晴らしい研究があったのか、この子等の為にも本研究は是非推進せねばならない。私は、この素晴らしい研究スタッフを全面信頼しつつ学校運営に当れる幸福を心底からしみじみと噛みしめた。どんな障害があろうと私の責任で解決すべく覚悟を固めた。

その後の実践が全校態勢でできたのはひとえにこの時の稲田校長の勇断のお蔭である。